

**藤井雄之助**

もし、甲子園に出場していたら、  
今日の僕は  
なかったかも知れない……



MUSICIAN

[KIYOTSUGU SASAKI]

兄のギターを借りてはじめて弾いた曲が、かぐや姫の「二十才の別れ」。小学校四年生の頃だった。それ以来、しばらく彼の部屋には70年代のフォークソングがいつも流れていた。自分のオリジナルソングをつくったのは中学一年生の時。

「君のために生きてきた、力になってきた……」今思い出すと照れ臭くて歌えないけれど、その時は自分の気持ちで音になったうれしさでいっぱいだった。中学三年の時には当時流行っていた、さだまさしの「おやじの一番長い日」に対抗して「ある愛の物語」という曲をつくったこともある。歌詞は二十

六番まで、途中でメロディが変わる？ 大変な曲だった。

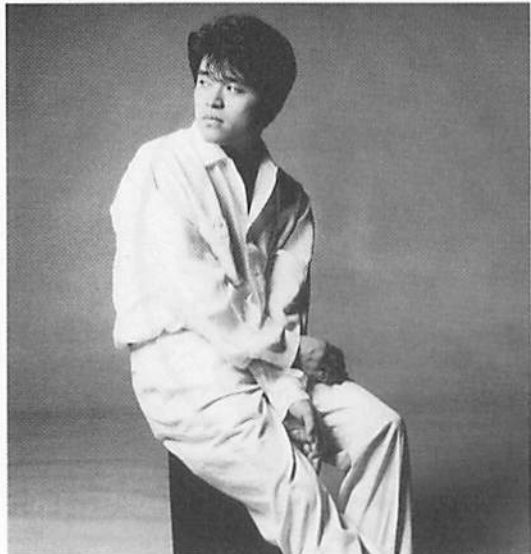
他のジャンルの音楽も聴いてはいたが「自分にはちばん似合うのはやはりフォークソングだ」との思いは日を追うごとに強くなった。そんな彼が最も傾倒したミュージシャンが松山千春。今でも尊敬している。

佐々木清次

二十八才。京都生まれの京都育ち。昨年五月、日本クラウン(株)より、「ピリオド」という曲でデビューしたシンガーソングライターだ。

「父が瓦屋をやっていたので、家に

# 佐々木清次



には有名企業からさまざまな就職の誘いがあった。しかしその時の彼には歌を歌うこと以外にも見えなかった。まったくアテもなく、無謀とも思えたが野球という目標にピリオドを打った時、歌への熱意はすべての状況に優先していた。

卒業後、業界との接点をもつために腐心した彼だったが、KBS京都にアルバイトとして入ったことが転機となった。ADとして働くうちに、シンガーソングライター・みのや雅彦氏の目にとまったのだ。みのや氏は彼を自分の番組に出演させたり、彼のために十五分枠のコーナーをもたせてくれた。小さなものだがライブ活動をはじめていた彼にとって、このTV出演は大きな支えになった。そうしたことが積み重なって、少しずつ、彼はシンガーソングライターと

しての自信を深めていった。

「北海道へ、松山千春さんを訪ねたこともあります。千春さんから、

「いまどきフォークソングをやるヤツなんてめずらしいよなあ。でもうれしいよ。絶対、がんばれよ」と、励まされました。今でも時々会うんですよ。千春さんにはとっても可愛がってもらっています」

ギタリストの石川鷹彦氏をはじめ、彼を支え励ましてくれるミュージシャンは多い。僕にとってフォークソングとは正直でウソのない素直な音楽なんです、と語る彼、佐々木清次はきつと目をかけずにはいられない存在なのだろう。

八月の六日、七日。

鴨川・御池大橋と三条大橋の河川敷であるイベントが催されていた。京都

はいつも土の匂いがしていましたけれど、それ以外にとりたてて変わったところのない、ごく平凡な家庭で育ちました。小学生の頃から野球に熱中してしまってます。しかも、野球をやるなら絶対ピッチャー以外にはなりたくなかった。この性格が音楽をやるならボーカルじゃない、という今の姿にもつながっているような気がします」

小学生の頃からギターを弾いていた彼は、同時に甲子園を夢見る野球少年でもあった。中学でもクラブ活動は野球ひとすじだったし、平安高校野球部でもピッチャーとして活躍した。

「野球部の練習はハードですから。

休みも盆と正月に一日あるくらいで。練習を終えて、学校から帰ってくるのも夜ですからね。まあ、そういう感じで甲子園を夢みながらイカグリ頭で、家では歌をつくって歌うというヘンなヤツでした……」

高校での三年間、憧れのマウンドに立つことは遂になかった。彼が平安高校野球部に在籍していた当時、京都では京商の井口投手が活躍、また現ヤクルトスワローズの荒木投手が一年生投手として、早稲田実業高校から甲子園デビューを果たしている。

甲子園には出場できなかったが、古豪平安野球部は京都で名高い。卒業前

## PROFILE

1964年、五月生まれ。牡牛座のO型。昨年5月21日「ピリオド」でデビュー。その後「24時間会いたい」「今夜悪女に」などをリリース。まもなくアルバムも完成予定。

ジャンルにこだわらず幅広い音楽性をいかしながら作品を創りつづけるのが彼の特徴。心からあふれてくる自然な言葉が独特のメロディにのって流れてくる。そこに広がるのは、等身大の彼の心の風景。曲づくりの原点を正直で素直なフォークソングとしながら、佐々木清次のジャンルを切り拓く。

染色青年団体協議会が主催する、第七回京の夏まつり・友禅流しファンタジーだ。その一角に設けられた特設ステージに、彼の姿があった。陽は西に傾きつつあったが、あたりは空気がゆるめくほど暑い。PAのセッティングに駆け回るスタッフ。開催が近づくとつれ、青年団や関係者の姿が増えはじめる。総合司会を務めるKBSの山崎弘士さんも現れた。

今日は、何時からですか？  
「夜9時からなんですけれど、音合わせはイベントが始まる前にやらなくちゃならないんです」  
「こういう雰囲気のステージって、やりにくい場合もあるでしょう？」  
「そうですね。まわりの人が自分に集中していないな、と感じたときはやりにくいですね。ライブをはじめてから五、

六年はそういうときポロポロでした。でも、慣れるしかないんです。心の中で熱狂している観客をイメージしながらステージに立つ。一種のイメージトレーニングですよ」  
PAが設置されているテントの中、彼はこうして今日の取材に答えてくれた。  
「もし、甲子園に出場していたら、今日の僕はなかつたかも知れない」  
別れる間際、そう云って微笑んだ表情を思い出しながら、今、彼にもらったCDに聴き入っている。

文 三村 溪  
写真 大田 メグミ